お経のことば

～それ故に、この世で自らを島とし、自らをたよりとして、他人をたよりとせず、法を島とし、法をよりどころとして、他のものをよりどころとせずにあれ。

大般涅槃経　訳 中村元

晩年のお釈迦様は北へ北へと旅をなさりました。恐らくそれはお釈迦様の故郷を最終目的地とする旅であっただろう、というのが現在の有力な説です。

実はこの時、とっくの昔にお釈迦様の故郷はある大国によって滅ぼされてしまっていたのですが、お釈迦様は敢えて承知の上で、故郷の土地を目指そうとされたと言われています。しかもそこまで辿り着けず、赤痢を患った病身の上にさらに食あたりを起し、御年８０歳にしてクシナガラという町でお亡くなりになりました。悟りを開かれた御身でありながら、人生の終幕の場所として廃虚となった故郷を目指し、瞑想によって涼しく死を迎えることができたにもかかわらず、この世に受けた肉体を余すところなく燃やし尽くし、血便を滲ませながらも自身の足で懸命に歩みを続けられた・・・。大般涅槃経というお経にはそのようなお釈迦様の最期のご様子が生々しく伝えられています。

ある場所でお釈迦様の病が激痛となって現れた直後、お釈迦様がなされた説法の一部が上のお経のことばです。後世『島』が『灯』に置き換わり、自灯明・法灯明という言葉が生まれ、伝教大師のお言葉である『一隅を照らす』という大慈悲の精神の礎となりました。

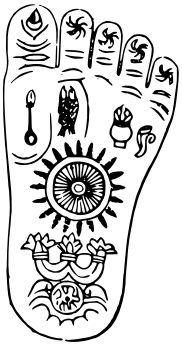
お経のことばの『他人をたよりとせず、～他のものをよりどころとせずにあれ。』とは、なにも孤独になれということではありません。簡単なことのようですが、我々の日常は無意識のうちに他に依存してしまっているのです。ここに一つの例を取り上げて説明したいと思います。

例えば『希望』という言葉。通常、我々は何か他のものに希望を見出します。「きっと来年は景気が良いだろう。」、「きっと配置替えで環境が良くなるだろう。」、「彼は我々の希望だよ。」、「まぁ何とかなるだろう。」等々きりがありません。けれども、上のお経の言葉を実践するならば、希望とは本来自らの意志の中に見出すべきものなのです。加えて法とはつまり仏法＝お釈迦様の教えであり、これによって自らの意志による歩みのぐらつきと言えるものを日々修正していくのです。

つまり希望の源は自分の中の意志に眠っているのです。そしてその意志を実践することこそが幸せに通じていきます。

「幸せとは何だろう？」多くの人の疑問であり、また疑問の数だけ答えもあるのでしょうが、ひとつ共通して言えることは、幸せとは成ることでも得ることでも、さらには感じることでもなく、『行うこと』なのだということです。

毎夜こっそり取り出してニヤニヤ眺めるものでもなく、隣の芝生ではないですが、他人と比べるものでもなく、何らかのそれぞれの善なる意志によって一生懸命に行うこと、その意味に於いて誰もが幸せになれると言えるのではないでしょうか・・・。お釈迦様は常に『どう生きるか』を語られています。



- **9月２５日(日曜日)　千体流し彼岸会（ヒガンエ）**

場所・時間ともに未定

- **毎月２８日　柱源護摩供（ハシラモトゴマク）とヨーガ体操(無料)**

柱源護摩供は午前9時と午後3時の2回です。
※葬儀が重なると変更される場合があります。

ヨーガ体操のスケジュール

	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
１０時半～		○	○	○		○	○
１６時半～	○						

本山修験宗　大瀧山　護国寺
７８１－２１５５
高知県高岡郡日高村九頭２９１
☎　０８８９－２４－７２４４
ホームページ☞gokokuji.site
仏事に関してのお悩み、ご質問、行事に関するお問い合わせ等、お気軽にお電話ください。